

1 - 1 北海道とその周辺の最近の地震活動 (1985年5月～11月)

Recent Seismic Activity in and around Hokkaido (May - November, 1985)

北海道大学 理学部

Faculty of Science, Hokkaido University

この期間の浅発地震の震央分布を第1図に示す。浅発地震ではMが5.4を超える地震は発生していない。太平洋沿岸には注目すべきほどの地震活動はなかった。内陸部では主な地震活動として次のものがあつた。第1図に発生日とMを記入してある。

- (1) 6月25日から雌阿寒岳南方で双発型の群発性地震活動(最大地震M4.7)が発生した。この詳細は本紙で別に報告されている¹⁾。
- (2) 宗谷海峡で6月8日, 12日, 7月19日に微小地震があり, 稚内で有感であつた。宗谷海峡の浅発地震で有感となつたのは1982年3月10日以来のことである。
- (3) 9月19日10時56分, 札幌市の一部で地震を感じた(M2.5)。1985年1月23日の地震と同じ位置であつた²⁾。
- (4) 同じく9月19日12時19分から函館沖で微小地震が連続し, このうらの何個かは函館市西部地区で有感であつた。これらの地震は1978年末から約2年間にわたって続いた函館群発地震³⁾と同じ場所で発生した。函館群発地震活動が終息後, 同じ場所で時間的に集中して発生した地震活動は今回が初めてのもので, 活動経過が注目されたが, 約8時間でこの活動は終息し, その後の地震活動は認められていない。
- (5) 9月20日から日高山脈南部で双発型の群発地震活動があつた。

第1群主震 Sept.20 08h42m 143.305° E 42.059° N 55km M4.3

第2群主震 Sept.23 16h46m 143.304° E 42.066° N 55km M4.6

第2図に示すように, 両群は各々上に示した最大地震からその活動が始まったが, 単純な本震-余震型ではない。Mの平均値は第1群で $\bar{M} = 2.85$, 第2群で $\bar{M} = 2.29$ である。また, 第2主震では直後に余震が1個観測されているのに対して, 第1主震では10分後にはじめて余震が観測された(第3図)。これらのことから, 第1群は前震的性格をもっていたと考えられる⁴⁾。(本谷義信)

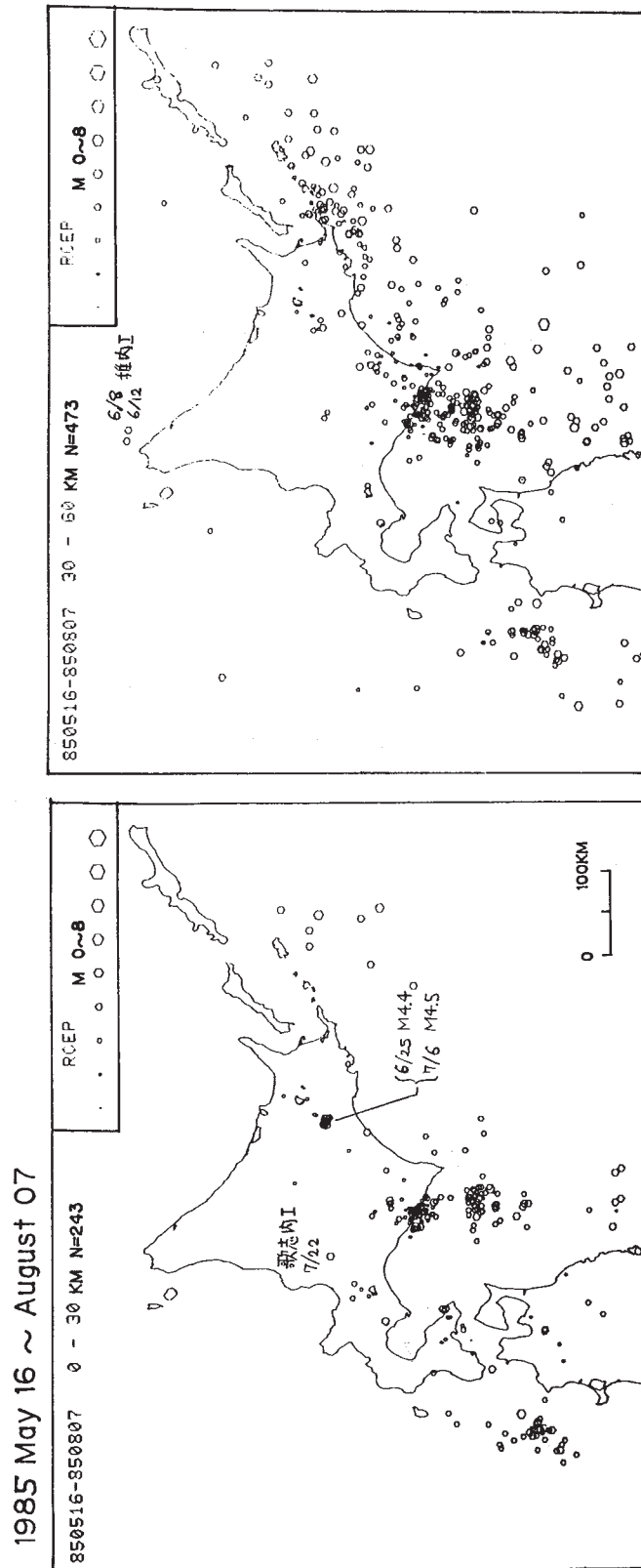
参 考 文 献

- 1) 北大理学部: 阿寒, 徹別岳付近の双発型地震(1985年6～7月), 連絡会報, **35** (1986), 5-7.
- 2) 鈴木貞臣・本谷義信: 1985年1月23日札幌直下地震(M3.5)の震源と震度の調査, 北大

地物研究報告, 46 (1985), 85 - 91,

3) 本谷義信・鈴木貞臣・高波鉄夫・石川春義・岡山宗夫：函館群発地震活動 (1) —地震活動と震源分布—, 地震, 36 (1983), 337 - 350.

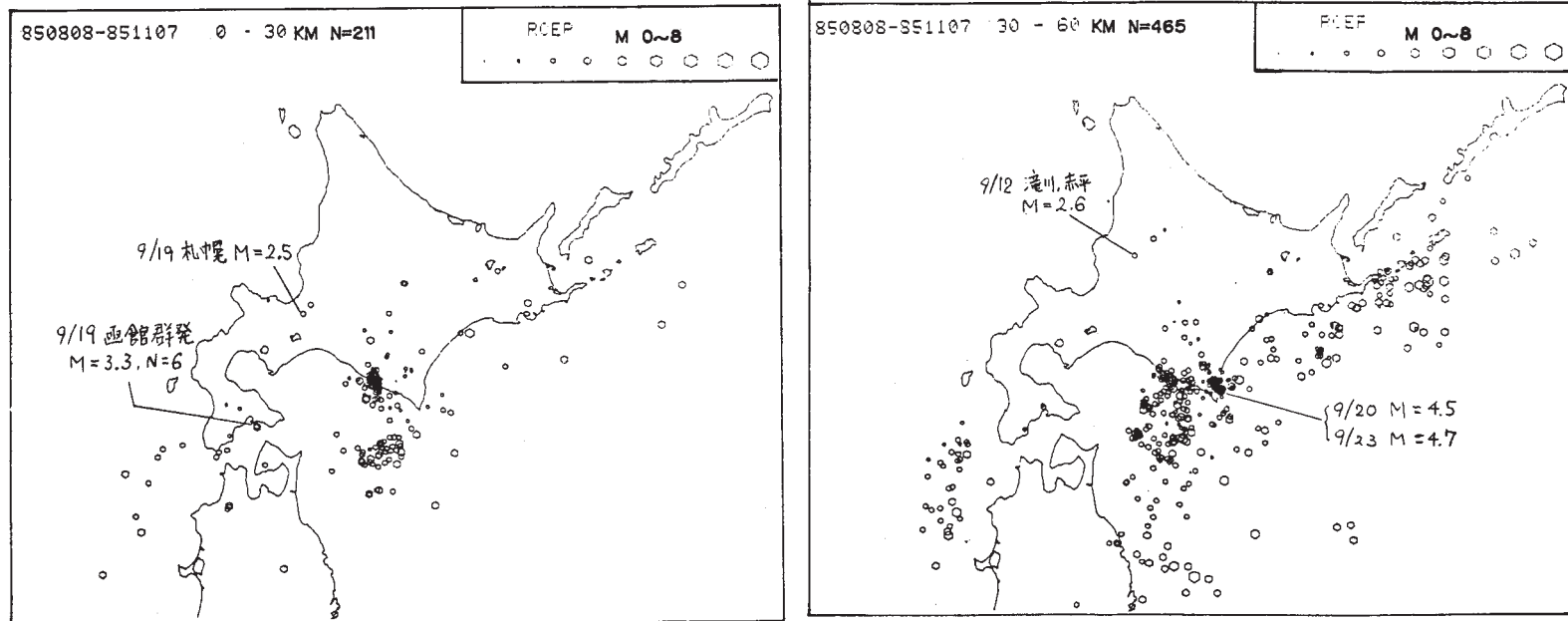
4) 本谷義信：1981年10月3日ペテガリ岳双発地震群の波形相似性, 地震, 37 (1984), 125 - 129.



第1図 北海道とその周辺の浅発地震の震央分布

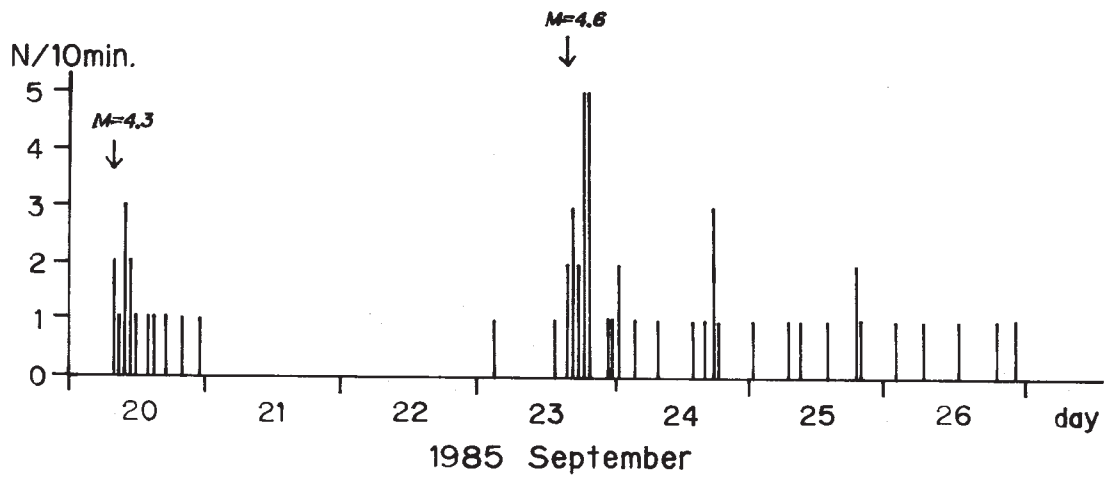
Fig. 1 Epicenter distributions of shallow earthquakes in and around Hokkaido.

1985 August 08 ~ November 07

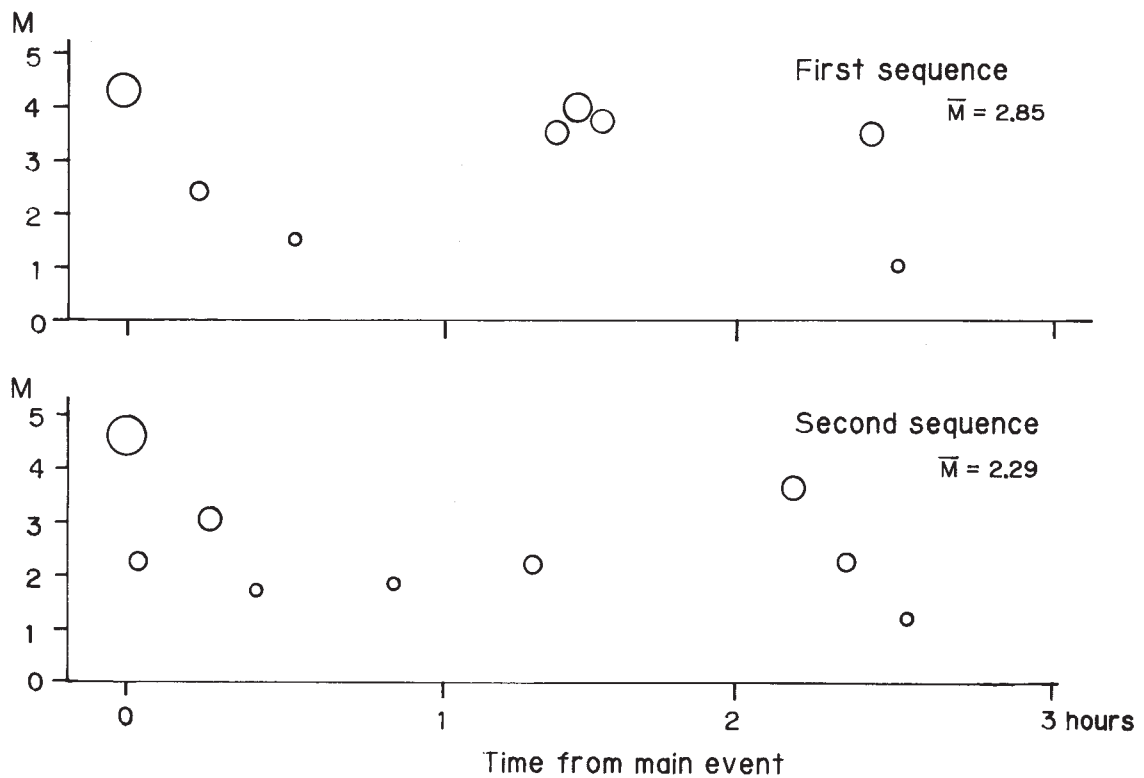


第1図 つづき

Fig. 1 (Continued)



第2図 日高山脈南部に発生した双発地震群の10分間毎の地震回数
 Fig. 2 Twin earthquake sequences occurring in the Hidaka range, Hokkaido.
 Number of events per every ten minute.



第3図 日高山脈南部双発地震群のM-Tプロット
 Fig. 3 Magnitude-time plots of the twin earthquake sequences.